

娘と地域に伝える「1. 17」の教訓

”防水” マスカラで備えたまぶたから、やっぱり涙が何度もこぼれ落ちた。「一度は死んだと思った命。こんな日が迎えられるなんて」。名古屋市瑞穂区の市臨時職員、松本早江子さん（38）はこの春、小学校の卒業証書进行う長女を、くしゃくしゃの顔で見つめた。

銀行員だった十二年前の一月十七日早朝、兵庫県西宮市の社宅で阪神大震災に直面した。「ゴジラがつかんで揺らしているのかと思うほど」の、天地がひっくり返るような揺れ。七ヶ月の乳飲み子だった長女に布団をかぶせ、夫とともに覆いかぶさった。とても恐ろしく長い時間。ただただ必死で腕の中の小さな命を守り続けた。

誰もが大変な状況だった中、思い出するのは地域の人々の思いやり。「ミルク用の水くまないかん」「あったかいもん食べさせないかん」。年配の人たちが口々に長女のことを心配してくれた。一人でリュックを背負って飛んできた高齢の母の姿を見たときは、感謝の気持ちで号泣した。

当時のことを、長女に時々話す。「いろいろな人に助けてもらったんだよ」。ふーんと、感慨深げに黙りこくる長女。十二歳なりに、いろいろ考えているのだろう。卒業式で書いた「将来の夢」に「相手の気持ちを思いやれる大人になりたい」とあった。その文字に、また目頭が熱くなった。

いつどこでまた、あんな大地震に遭うかわからない。新潟県中越地震、能登半島地震に三重県中部を震源とする地震……。ニュースを見るたび、被災者の身をわがことのように案じる。

震災後に生まれた二女も含め、家族四人で生存確認の決め事を作った。大地震が起きたら、何があっても近くの中学校に集合し、そこで全員がそろうまで待つ。モノの備えも大事だけど、大震災で学んだのは、心の結束。「家族や地域のつながりで、自分たちは生き抜けられた」と確信する。

先日、地区の子供会だよりも、長女の卒業に際した思いを記した。近所の人たちから、予期せぬ反響が次々と寄せられた。「大変だったんだね」「おめでとう」。ここでもまた、地域の温かさを感じた。「どんなにIT（情報技術）社会になっても、大事なものは人と人との結びつきなんだよ」。ずっと、娘たちに伝え続けたいと思っている。（中日新聞 青空）